

[研究ノート]

# ゼミ活動における デザインによる過疎地域の 寺院問題への取り組み

広根 礼子(金沢学院大学 芸術学部 芸術学科)

## 抄録

本稿は、筆者が金沢学院大学美術文化学部メディアデザイン学科(現、芸術学部芸術学科、2016年度より改組による名称変更あり)で担当しているゼミの学生らと行った過疎地域の寺院問題に対する取り組みの研究報告である。ゼミ担当学生に実家が寺院(日蓮宗)だという学生がおり、日々の関わりの中で、自宅寺院や周辺の寺院を取り巻く諸問題について(周辺環境の過疎化、檀家の高齢化や減少など)話題に上ったことに端を発する。近年若者の宗教観、死生観の変化に伴う先祖とのつながりや墓のあり方やなどが社会問題として顕著化しており、一ゼミ生の個人的な問題ではなく、いつかは考えねばならない家族や自分の死生観に向き合う機会として、ゼミのプロジェクトとし、デザインの力を使用して解決の糸口を探れないか考えた。本稿では、仏教(日蓮宗)に対する理解、1泊2日で行った寺院体験の記録、体験した内容を活かして実施されたワークショップとグッズの企画提案と今後の展開について述べることにする。

## Key word

ゼミナール アクティブラーニング デザイン 日蓮宗 過疎寺院

## 1.はじめに

### 1-1.実践の背景と目的

金沢学院大学では、1年および2年について担任制が敷かれ、学校生活全般におけるサポートを行っている。芸術学部芸術学科においては、現行1学年60名程度の学生を担任2人、副担任2人の4人体制でサポートしている。美術文化学部メディアデザイン学科3年および4年は、希望する専門分野に明るい教員に指導を請うゼミ担当制が敷かれ、現行6人の教員が1学年につき7名から10数名の学生を担当し、原則2年間にわたり必修の履修科目「卒業研究I」「卒業研究II」の合計8単位を担当している。本学のゼミ担当教員の役割は、卒業研究をはじめとする課題制作の指導にとどまらず、取得単位・出欠の把握、就職サポート、悩み相談、学納金納入に関する情報の把握、等々、学生生活全般のサポーターとして学生個人に深く関わることになる。

筆者は、2015年に併設の金沢学院短期大学から金沢学院大学の美術文化学部メディアデザイン学科に所属変更となり、2016年度から、3年の学生11名(男子1・女子10)のゼミを担当することになった。通常教員は1、2年の間に個々の学生の得手不得手や個性を把握した上でゼミ配属となるのだが、筆者の場合はゼミ配属が決定した時点で、メディアデザイン学科3年生に対する授業担当時間が皆無であったため、教員も学生も「はじめまして」という挨拶とともにゼミ活動が始動することになった。

学生同士もさることながら筆者自身、まずは、学生のパーソナリティを知るための時間と体験の共有が急務だと思われた。また、時間や体験を共有することによってチームワークが深まり、より柔軟なコミュニケーションにつながると期待し、夏休みを利用したゼミ合宿を行う計画を立てることにした。

そんな中、ゼミ生に実家が寺院(日蓮宗)であるという女子学生(以後「瀨さん」と記す)がいることがわかった。瀨さんの実家は羽咋にあり、大学のある金沢から車で1時間程度の距離であるという立地条件も好都合であり、夏のゼミ合宿にお寺の空いているスペースを使用させてもらえないだろうか、と打診してみたところ、父である住職から使用の許可をもらうことができた。その時点では、研修と宿泊ができる「場」としてお借りする予定で、「内容」は別途考えていた。ところが、その後の瀨さんとの会話の中で、地域を取り巻く過疎問題、それに伴う檀家の減少や高齢化など、実家の寺が抱える問題について話題に上ることがあり、社会全体の死生観の変化もあいまって、漠然とした不安の吐露を耳にすることになった。それはまた、仏教者の家に生まれた者として、大学で学んでいるデザインを活かして実家の寺をなんとかもり立てることができないだろうか、という前向きな問いかけでもあった。咄嗟に「ゼミでなにかできないだろうか」という思いが脳裏をよぎった。話を進める前に、他のゼミ生に宗教的な制約がないかを確認したところ、幸いにも美術やアートの観点から仏像や仏画、寺社仏閣に対する興味関心を抱いている学生はいたが、ある特定の宗教に対する強い信仰心を持つ学生はいないことがわかった。そこで、「どうしたら、若い人がお寺に興味を持って足を運ぶようになるか」についてゼミ全体で考えてみることにした。

## 1-2. 本稿の構成

本稿の構成は以下の通りである。第2章では、寺院のおかれている社会的背景として、地方都市における過疎地域の寺院が直面している窮状と、窮状のなか、新しい業態を模索している寺院の事例について記す。第3章では、ゼミ生と行った寺院体験について、体験内容を具体的に記す。そして体験後に得られた学生(体験する側)と住職(受け入れる側)、それぞれの立場からの感想を記す。第4章では、寺院体験を活かした提案について、実践に至る経過と実践内容について記す。第5章では、実践内容に対する効果と課題について記す。第6章では、特に若い僧侶たちが同世代に向けて行っている寺院の事例について記す。第7章では、まとめと展望について記す。

本稿におけるデザインの定義は、狭義には、視覚的な情報を伝達するための印刷物やグッズのデザインを指し、広義には、情報の取舍選択や整理整頓を含む物事の計画に対する手法やスキル全体を指すものとする。

## 2. 寺院の社会的背景

### 2-1. 寺院の過疎化

「若者がお寺に興味を持って足を運ぶようになる」ことを考えるには、まずは寺院のおかれている現状を把握する必要がある。全国の寺院が存続の危機に瀕していると言う声が聞こえて久しい。國學院大學、石井研士氏は、「2040年までに現在約7万7000ある寺院のうち35～40パーセントが『消滅する』可能性がある」と指摘している[鵜飼 2016]。全国の多くの寺院の経営状態が悪化する中、特に地方都市の過疎地域においては、寺院が存続し続けるための環境がさらに厳しさを増しているという。地方都市が抱える人口の高齢化や人口の流失による過疎の問題は、そのまま過疎寺院の問題に通じている。「『寺院消滅』の原因には歴史的背景(過去の要素)と、昨今の社会構造の変化(現在・未来的要素)の二つがある」[鵜飼 2016]といわれているが、本稿では後者について検証する。

社会構造の変化に伴う問題とは、「地方から都市への人口の流出、住職の高齢化と後継者不足、檀家の高齢化、布施の『見える化』、葬儀・埋葬の簡素化など」が挙げられ、「全国では空き寺が急増し、寺院の整理・統合の時代を迎えようとしている」[鵜飼 2016]ことである。住職の高齢化や死去に伴い空き寺となった寺の多くは、地域の同門寺院が兼務する形で守っていくのが通例で、このような「被兼務寺院」「兼務寺院」「代務寺院」と呼ばれる寺が近年急増しているという。空き寺になっていく多くは僻地にある檀家数の少ない寺であるが、そのような農山漁村にある寺院の割合は、全体の半数にものぼり、例えば、浄土真宗本願寺派が55%、日蓮宗では42.5%もある。「空き寺の直接的な原因は『後継者の不在』だが、その背景には少子高齢化、都市と地方の格差問題など、近年の社会構造の変化が横たわっている」[鵜飼 2016]。

寺檀制度の始まりは、江戸時代に幕府が定めた寺請制度(てらうけせいど)に端を発する。以来日本国民は漏れなくどこかの寺の檀家になることが義務付けられた。寺院の経営は、檀家から得られる墓地管理料<sup>1)</sup>や護持費<sup>2)</sup>からなる固定収入と、法事や葬儀の際に生じる一時収入である布施でまかなわれている。前者は檀家の高齢化などで檀家の数が減れば減少し、後者においても、葬儀のスタイルが大きく変化した1990年代以降、それまで自宅や寺で行われていた葬儀がバブル以降、大多数がセレモニーホール(斎場)で行われるようになったため大幅に減少している。その後行われるようになった家族葬<sup>3)</sup>や、近年耳にするようになった直葬や散骨、樹木葬など葬儀の簡略化が益々進めば、寺が葬儀に関与しないケースも増え、布施自体が発生しないことになる。現に葬儀や仏事に関する情報サービス会社「鎌倉新書」が2014年に全国の葬儀会社を対象に調査したりレポートによると、全葬儀に占める家族葬の割合は全国平均で32パーセント、直葬の割合は16パーセント。まさに6件に1件が葬儀をしない直葬をセレクトしているということになる。

### 2-2. 変化する寺院

社会構造の変化に伴い寺院が担ってきた仕事が減少する中、宗教活動だけでは生活が成り立たない寺院の中には、幼稚園経営や駐車場経営、物販などの「サイドビジネス」を展開しているところも多い。さらに檀家の高齢化において発想の転換を図り、グループホームの経営を成功させ地域と連携している寺院もある。

大阪府池田市にある浄土真宗、如来寺の住職である釈徹宗氏は、2002年にNPOを立ち上げ、寺の裏に位置する築60年の民家を改修して認知症高齢者のグループホーム「むつみ庵」を開所し運営している。むつみ庵は「地域に支えられる里家」をテーマに掲げ、「古民家改修型」で「村落タイプの檀家制度を活用」し、地域雇用の創生にもひと役かっているという。「日本仏教をダメにした諸悪の根源であるとされ、ずっと批判され続けてきた寺檀制度も、視点を変えれば社会資源となり得るのだ。また、地域コミュニティが機能しにくい今、貴重なソーシャル・キャピタルでもある」[釈 2016]と説いている。

同じように、僧侶という立ち位置は変えず、「よりよいものを追求する」という姿勢で寺に人を集める試みもみられる。

長野県千曲市にある臨済宗妙心寺派の開眼寺(かいげんじ)住職、柴田文啓氏は、企業の元役員で、定年後に住職になる道を選んだ人物である。柴田氏は企業の新人研修やビジネスマン向けのセミナーを開講して、「諸行無常、無常迅速」<sup>4)</sup>「利他」<sup>5)</sup>などビジネスパーソンが仏教に学ぶべき教を説いている。「仏教は2500年、キリスト教は2015年、イスラム教も1300年の歴史を持ちます。それだけ長い歴史をくぐり抜け、今なお存続しているのは、そこに真理があるためです。人間が人間らしく生きていくため、揺るぎない信念を持つため、歴史が証明した真理を多くのビジネスパーソンが学ぶ必要がある」[鶴飼 2016]と語っている。

また、「葬式をしなないと選択することで、お寺本来の役割に立ち返ろうとした」[秋田、北村 2015]寺院がある。大阪市にある浄土宗、應典院(おうてんいん)は、1614年に創建された、なにわの名刹、大蓮寺の三世誓譽在慶隠棲所として創建された塔頭寺院である。1997年、大蓮寺創建450年記念事業として再建される際、一般的な仏事ではなく、「気づき」「学び」「遊び」をコンセプトとした地域ネットワーク型寺院として生まれ変わった。應典院は、寺檀制度ではなく、NPOが運営しており、音響・照明施設を備えた円形型ホール仕様の本堂、セミナールーム、展示空間を備えている。そこでは、「集うことやかかわりあうこと、表現すること」に重点を置いた演劇活動や講演会など、年間100以上のイベントが開催され、3万人以上の若者が集うという。住職の秋田光彦氏は、「このお寺は時代と共振している。昔からお寺は古くて変わらないものと決まっていますが、そういう動態を繰り返す寺がひとつくらいあってもいい」[秋田、北村 2015]と語っている。

### 3. 寺院研修

#### 3-1. 研修先の周辺環境

研修先の石川県羽咋市にある日蓮宗圓融寺(えんゆうじ)は、前述の「代務寺院」である。住職の濱巖丈(はまげんじょう)氏はゼミ生の父、副住職の濱正通(はましょうつう)氏は兄。細い路地を挟んだ向かいには、実家である本覺寺(ほんがくじ)がある。父巖丈氏は3度の荒行<sup>6)</sup>を成満、兄正通氏も2017年2月に荒行の初行成満を果たしている。

本覺寺と圓融寺の周辺は、前田家にゆかりの深い日蓮宗本山妙成寺(みょうじょうじ)の他、いくつもの寺院が密集している寺院地帯である。妙成寺は重要文化財の建物10棟を有しており、2017年度から、3カ年計画で建物や仏像、埋蔵文化財、古文書などの総合的な調査を展開し、2019年度末に報告書を文化庁に提出するため、国宝指定に向けた学術調査を本格化さ

せている。周辺地域一帯は、近くに日本海も臨める田畑の緑が美しい里山であるが、この地域も近年過疎化の波が押しよせている。

国立社会保障・人口問題研究所(社人研)の「日本の地域別将来推計人口(2013年3月)」によれば、若年女性(20~39歳)の人口減少率(2010年→2040年)が5割以下に減少する市区町村は896自治体、全体の49.8パーセントに上ることが指摘されている。このままいくと急激な人口減少に遭遇するこれら896自治体は「消滅可能性都市」[増田 2014]として発表され関係者に大きな衝撃を与えた。この集計によると羽咋市は、若年女性の人口変化率がマイナス69.6パーセントにのぼる「消滅可能性都市」に該当し、2010年の若年女性の人口2,061名(総人口23,032名)が、2040年には627名(総人口12,866名)にまで減少すると予測されている。

### 3-2. 研修の準備

本覺寺と圓融寺での寺院体験に先立ち、ゼミ生は各自担当を決めて、日蓮宗や広く仏教についての基礎知識や現状を調べて発表を行った。調べた項目は以下の通りである。

- 日蓮宗、日蓮聖人について
- お会式(おえしき)、万灯(まんどう)行列について
- お勤め、勤行(ごんぎょう)、仏具、装束、数珠について
- 加持祈祷、修法師(しゅほうし)、荒行(あらぎょう)について
- 法式聲明(ほっしきしょうみょう)、聲明師について
- 三宝尊(さんぼうそん)、十界曼荼羅について
- 鬼子母神と十羅刹女(じゅうらせつによ)について
- 写経について
- 過疎寺院の現状や取り組みについて
- 若い人が興味を持って参加している寺のイベントや試みについて

表1 寺院体験に先がけて行った事前調査項目

寺院体験の目的は、体験後に過疎地域にある寺に「どうしたら、若い人が興味を持って足を運ぶようになるか」についてディスカッションをし、それをもとに何らかのアクションを起こすことで、過疎地域にある寺に「若い人が興味を持って足を運ぶようになる」ことである。そこで、調べた情報を共有するために全項目のプリントアウトを各自一冊のファイルにまとめて研修に持参することにした。

### 3-3. 研修内容

寺院体験は、2016年8月9日~10日の1泊2日で行われた。主な研修先は、圓融寺。宿泊は、多人数での風呂や洗面・トイレ使用の便宜、虫さされや暑さによる寝苦しさへの配慮から、近くにある国立能登青少年交流の家とした。研修の項目は以下の通りである。

#### 1 日目

- ①日蓮宗における神々についての解説(講師:瀨巖丈氏)

圓融寺の祭壇には多くの神々が祀られている。日蓮宗の本尊とは、一般には礼拝の対象とし

て安置する主要な尊像・主要の境的として安置する三宝諸尊をいう。日蓮聖人は本門の法華経を仏教の中心とし、「本門の本尊」への帰依を説いたと伝えられている。圓融寺の本尊は、「一塔両尊四土」の型を成しており、中央に「南無妙法蓮華経」と書かれた宝塔を置き、左に釈迦如来坐像と右に多宝如来坐像、その左右外側に「法華経」の四大菩薩(上行菩薩・無辺行菩薩・浄行菩薩・安立行菩薩)が配置されている。祭壇中央には、日蓮聖人、向かって左側には大黒天、右側には子供やお産の守り神として有名な鬼子母神が据えられている。その他にもたくさんの神様がいらして、とても一度では覚えられないが、十羅刹女と鬼子母神に関しては、恐ろしい逸話<sup>7)</sup>も相まって、学生らの記憶に深い印象を刻むことになった。

## ②お曼荼羅の鑑賞

お曼荼羅は、仏さまの心(悟りの世界)を文字であらわしたものである。インドの言葉で「輪円具足」と訳し、車輪のように円の中に一切の諸法が全て含まれているという意味があるという。日蓮聖人は本門虚空会(ほんもんこくえ)の久遠実成の本仏釈尊の内証を観心して、一幅の紙面に文字で書き表して大曼荼羅と呼んだ。中央に「南無妙法蓮華経」、左右にお釈迦様と多宝如来、その他の菩薩や十界の代表を太く勢いのある筆文字で連ねたその独特な世界観に一同見入った。

## ③ご祈祷体験

日蓮宗の「加持祈祷」には、その効力によっていくつか種類がある。天部の神々に法楽を捧げ、その功德を受ける「法楽加持」を用いて、事前にお伝えしてあつたぜミ生全員の名前を読みあげてご祈祷(図1)いただいた。その他にも、病を癒す「当病加持」、悪霊祓いの「調べ加持」などについても実演を交えて説明を受けた。「悪霊」「狐憑き」といった普段の生活では遭遇しにくい言葉も語られるにつれ、学生らは神妙な面持ちで聞きいていた。



図1

## ④妙成寺見学

妙成寺は、700年前の1294年(永仁2年)に建立された北陸における日蓮宗の本山である。加賀前田家初代から5代に亘って造営され、3代利常公は、母(寿福院)の菩提所として本堂、祖師堂、五重塔を建立したといわれている。現在、国指定の重要文化財を十棟有し、観光客も大勢訪れる地元の有名寺院ということもあり、本覺寺住職の解説を受けながら境内を回った(図2)。普段見学者の入室が許されていない書院(国指定重要文化財)にも特別に入ることが許可され、壁の掛け軸や様々な仏具・調度品を間近に見たり、美しく整えられた庭園から五重塔(国指定重要文化財)を望む貴重な体験を楽しんだ(図3)。



図2 妙成寺の仁王門



図3 書院から五重塔を望む(責任者から管理を得て入室)

### ⑤ 聲明(しょうみょう)体験

聲明(または声明)は、メロディのついたお経のことで、お唱えや法要儀式全般の研修と研鑽を積んだ法要儀式の専門家である聲明師によって行われる。副住職による、声と鳴り物の音に、開け放たれた窓から聞こえる蝉の鳴き声とが相まった、厳かな仏教音楽に浸った。その他、楽譜にあたる墨譜(ぼくふ)に書かれた、音階を示す独特な記号に見入ったり、たくさんある鳴り物の中で「鏡(にょう)」の持ち方や音の出し方を体験した(図4)。



図4 鏡の鳴らし方を習うゼミ生

### ⑥ 写経体験

印刷された経文の上に敷いた薄い半紙に、筆や墨、筆ペンなど、各々が持参した道具を使用して、仏教の教えである「七仏通誡偈」の写経を行った(図5)。

2、3文字書き写した時点で学生からは、「意外と難しい」「書き終わるのだろうか」などの不安を吐露する声が聞こえたが、書き進んでいくうちにいつしか話し声も途絶え、皆がひたすら書き写す行為に集中していった。末尾に願い事や日付け、名前を記入し、書き終えた写経を皆で眺めながら足のしびれとともにしばし心地よい達成感に浸った。



図5 写経をするゼミ生

ー 夕食 ー (圓融寺の台所を借りてカレーライスを自炊)

### ⑦万灯(まんどろ)見学

白やピンクの和紙で折られた花がしだれ桜のように飾られた「万灯」は、日蓮聖人が入滅(10月13日)された時に、時ならぬ桜が咲いたことに由来する。本覺寺では通常、お会式の時以外は解体し、しまわれているそうだが、住職と副住職のご厚意で、特別に組み立てていただいた(図6)。夜の暗がりの中、点灯した万灯の美しい印象は、学生達の眼裏にしっかりと刻まれた。万灯の明かりのもとで、持参した花火を楽しんだ体験も特別な思い出となった。



図6 本覺寺に設置された万灯

— 宿泊施設(国立能登青少年交流の家)に移動・就寝 —

## 2日目

### ⑧朝の勤行(ごんぎょう)体験・仏事の作法

朝5時に起床し、寝具の返却や割り当てられた館内の清掃を終えた後、6時半からの朝のお勤め体験に参加するため圓融寺に向かった。

日蓮宗の勤行は、法華経読誦(ほけきょうどくじゅ)と、唱題(しょうだい)の「南無妙法蓮華経」を中心として組み立てられている。一同お経の印刷された小冊子を見ながら住職に習って「南無妙法蓮華経」を唱えた。

社会人になると会社の葬儀に参列する機会も出てくる。その時、まごつかないよう正しい所作を身につけておくとよい、という住職の配慮から、お勤めの後、仏事の心得を教えていただいた。焼香については、香を焚く回数や額の前に掲げる高さ具合など、焼香前後の導師や遺族への礼の仕方や通る道筋まで詳しく教えていただいた。

— 朝食 — (瀨さんの母による手作り)

### ⑨寺院問題に関するディスカッション

朝食の片付けを終えた後、副住職も加わり、先行調査から得た知見や、2日間の寺院体験をふまえ、「どうしたら、若い人がお寺に興味を持って足を運ぶようになるか」を題目に据え、ブレインストーミングを行った(図7)。実際に様々な仏教的体験をした直後でもあり、周辺環境・物理的なお寺のスペース・施設内容等が具体的に把握できているため、アイデア出しはスムーズに行われた。集まったアイデアは、多様な方向性を有していたため、この場での集約はせず、大学に持ち帰って協議することとした(図7)。



図7 出された意見をまとめるゼミ生

### 3-4. 寺院体験のまとめと感想

#### 3-4-1. 体験者(学生)の感想

2日間に渡たる寺院体験は、そのほとんどのシーンで住職と副住職の協力のもとに執り行われ、一貫して日蓮宗の教えをわかりやすく説いていただいた。研修のまとめとして、ゼミ生は順番に感想を発表し、寺院・仏教・日蓮宗について、学びの成果を共有した(図8)。

以下に後日提出を求めたレポートから、学生の感想の一部を抜粋して記す。

寺院体験前、普段の生活とかけ離れた神聖な世界を覗くようで、なんとなく不安を感じる学生が多かったようである。「お寺のことについて全く知らなかったのもっと堅苦しい雰囲気の中かで研修が行われると思っていた」「事前に調べていた内容が難しかったので、その場でちゃんと理解できるか不安だった」という声が上がった。一方で、「元々、古いものが好きで、神社やお寺を見て廻る習慣があり、実際に他の宗派の行事に参加できることに興味を抱いた」と言う学生もいた。が、そのような学生であっても、やはり、「自分の生家とは違う宗派ということもあり、付け焼き刃な知識での研修に対して不安があった」と吐露している。

寺院体験終了後の感想を尋ねると、「事前に寺院や日蓮宗について調べたことの中かで、あまり興味を持てなかったものでも、研修の時に話を聞いて、興味深いものに変った」「仏教において密接な数珠一つにおいても、宗派によっても特徴があることや、焼香のマナーなど、今後社会に出ても大切なことを教わった」「宗派の違いもあり、普段聞くことがないお経や日蓮宗ならではの道具など目にすることができてよかった」「写経が楽しくて、今後もやりたいと感じた」「知識だけではなく体験を通すことで、宗教の奥深さに少し触れることができたような気がした」「全て終わってしまうとあっという間で、もう少しゆっくりと話を聞いたり、体験をしてみたかった」「住職さんの昔話や思いを聞き、時間をかけて仏教に取り組む姿勢を間近で感じる良い機会になった」「寺院は身近にあるが、知らないことばかりだったので、もっと知ろうを思える研修だった」と、様々な感想があり、寺院体験が充実したものであったことがうかがえる。中でも一番多かったのは、「楽しく体験ができてよかった」という感想である。学生達が寺院体験を「楽しい」と感じた事は、「若い人が寺院に興味を持つ」ということの立証にもなり、今回の寺院体験の大きな収穫であったと感じる。



図8 感想を発表するゼミ生

#### 3-4-2. 自宅としての寺院・濱さんからの感想

自宅寺院で研修することになった濱さんに於いては、2日間、住職とゼミの橋渡し役として忙しく立ち動くことになり、ことのほか大変だったのではないかと想像する。しかし、父のご祈祷や兄の聲明を聞くことは、家族の仕事である寺院のお勤めについて再認識する良い機会となり、そこに新たな気付きや発見があったことは、何よりも得がたい収穫ではなかっただろうか。彼女のレポートからもその様子が十分に伝わってくる。以下に彼女の感想を記す。(ほぼ原文)

「自分の親が持つ寺を使っただけの体験であるが、使う場所は同世代のみんなが想像するような大きなお寺というわけではないため、せっかくの夏休みを使った研修期間を充実したものに

することができるだろうかと研修をする前は色々心配だった。寺院体験をする前に、みんなで寺の下見をする機会があり、その際に父が、せっかくきたのだからついでにということでも少しだが寺や僧侶について説明をしていた。その時の様子を私は少し離れたところで見ているのだが、ゼミ生の人たちは、まだ下調べをする前だったから内容がわからないといった雰囲気、ますます研修そのものが、夏のつまらない味気のない思い出の一つになってしまうのではと不安であった。研修の体験内容は、家族による全面的な協力が不可欠であったため、どういった形で進めていくかなどの準備や打ち合わせなどが大変だった。

研修中は、僧侶である父と兄が、打ち合わせ以上の協力の姿勢でいてくれたことがありがたかった。そして、私もゼミ生のみなどと一緒になって寺院体験をした際に、父と兄がそれぞれ僧侶の立場で話をしているのを聞き、小さいころから見ているけど、ざっくりとしたことしか知らなかった僧侶としてのお勤めを改めて知る機会となった。また私の母も、人数分の朝食を作るなど、食の面で大きく協力してくれて、改めて寺に嫁いだことによって鍛えられた母の凄さを感じた。

研修後に第一に思ったことは、無事に体験合宿を終えることができたのでよかったということ。草木が多い自然のある場所でもあるので、ゼミ生の人たちがハチやそのほか変な虫とかに遭遇して刺されたりなど不快な思いをすることにならないでよかったなど思った。また、ゼミ生の人たちに体験のほうはどうだったかと聞いたところ、写経やお勤めなど色々と案外と楽しかった、為になった、などと言っていたのでほっとした。お寺でのことも、アプローチの仕方次第で若い世代の人たちに少なからず受け入れてもらえるんだと感じた。

### 3-5. 受け入れ先からのメッセージ

住職の瀨殿丈氏は日頃から、「誰もがいつでも気軽に訪れることができるお寺」を目指したいと考えているという。しかし実際にゼミ生のような「若い子達」に受け入れてもらえるかは最後まで心配だったそうである。寺院体験受け入れ後の感想についてお尋ねすると、「受け入れに際して、準備等は大変であったけれども、学生の皆さんが少しでもお寺というものを身近に感じてくれたのであればいいなと感じた。学生さん達にとっていい経験になってくれたなら嬉しい」と仰ってくださった。

副住職の瀨正通氏は、当初「事前に寺についての知識を調べてきたと聞いて、調べたことと実際に見る事は違ってくるから学生達は大変だろうと思っていた」そうである。それでも寺院体験受け入れ後の感想は、「分からないことでも学ぼうという姿勢で、興味を示して真摯に耳を傾けてくれたのが良かった」とのことだった。そして、「夏の暑い時期であり、また、かなりの自然の中であったが、学生の皆さんにお寺のことを体験してもらい、無事に何事もなく終えたので安心した」と話してくださった。

## 4. 寺院問題解決の模索と実践

### 4-1. 実践への模索

後期授業が始まり、寺院体験の振り返りを行った。まずは、たくさん撮影した写真をショートムービーにまとめたり、プレゼンテーションパネルにまとめたりする作業から始めた。また、合宿時のブレインストーミングで付箋に書いたいろいろなアイデアをもう一度並べ、再検討を行った。付箋にあったアイデアは多岐にわたり、多様なアイデアへの広がりが見られた。以下に一部を紹介する。

- 周辺寺院のスタンプラリーやwebページの開設
- イラストで仏様を紹介するパンフレットのデザイン
- オリジナル御朱印帳のデザイン
- お寺でバザーやコンサート・アート展の開催
- お寺にプロジェクションマッピング
- お寺ツアーの修学旅行への組み込み企画

表2 ブレインストーミングで出されたアイデアの一部 その1

- 体験し、得るものが多かったという観点から、
- 写経教室の定期開催
  - 一日お寺体験プラン
- 幽玄な美しさを間近で見た「万灯」に特化して、
- アート万灯のコンペ
  - ミニ万灯のワークショップ
  - ピアスなどのアクセサリへの商品展開

表3 ブレインストーミングで出されたアイデアの一部 その2

### 4-2. 実践の方法

振り返りを終えて、提案の多様な方向性を集約すると同時に、今後行うプロジェクトが、ゼミ生の実力と実施可能な規模に調整する必要があると実感した。そこで、出されたアイデアを「コト」と「モノ」という2つの異なる視点から再考して解決策を探るよう指示を出した。ゼミ生は2つのグループに分かれて、1チームは「コト」について、もう1チームは「モノ」についてそれぞれ担当することとし、具体策を練るためにグループディスカッションを重ねていった。合宿時のブレインストーミングでは、本覺寺と圓融寺のみの企画ではなく、周辺寺院も巻き込んで行うことを想定したアイデアもあったが、各々の寺院の事情もあり、今回は、本覺寺と圓融寺単独で行うことを前提にした。

「コト」チームは、紆余曲折の末、東京・雑司ヶ谷鬼子母神の参詣土産として、江戸時代から作られている郷土玩具「すすきみみずく」をヒントに、「すすきみみずく」のワークショップを開催することに決定した。鬼子母神堂境内の縁日で販売されている「すすきみみずく」が愛嬌があってかわいらしいことに加え、材料となるすすきが近隣環境から十分に採集可能であることが決め手となった。

一方「モノ」チームは、当初本覺寺のオリジナルグッズを開発することを模索していたが、資金面の問題から断念することになった。翻って、日蓮宗新聞社<sup>8)</sup>のウェブショップにて、サイトのキャラクターである「こぞうくん」のストラップやハンカチや仏事に関わる様々なグッズ販売をしていることを知り、若者がお寺で使いたくなるようなグッズを何点かデザインし、1冊の企画書にまとめて日蓮宗新聞社に提案することにした。

#### 4-3.「コト」でお寺に足を運んでもらう試み:「すすきみみずく」ワークショップ

ワークショップは、10月23日「お会式」(おえしき)のタイミングに合わせ、法要と連携する形で開催された。「お会式」は「法会の儀式」の略語であり、日蓮聖人ご入滅の忌日に営む法要である。「報恩講」「恩命講」「御命講」とも言われている。

当日は、午前中に本覺寺に檀家が集まる法要があり、「コト」担当のゼミ生らも檀家の方々に混ざって参加した。その後、御齋(おとき)の席にも同席させていただき、彼女等の祖父母の年齢に相当するであろう檀家の方々と食事の席を囲んで会話を楽しんだ。やがて法要が開きとなるタイミングで、ワークショップに参加していただくよう声かけを行った。

ワークショップの詳細は、事前に用意したすすきを材料にして「みみずく」の形に整形したボディを並べておく(図9)。その中から檀家の方々に好きなものを選んでいただき、シールで目をつけたり、リボンを巻いたりする仕上の行程を体験してもらった(図10)。体験者の負担にならないようにという配慮から、短時間で仕上がるように工夫したワークショップであるため、体験時間は一人15分程度と短いものであったが、ワークショップに参加した檀家の方々の中には、「こんなところで若い人達と楽しいことをさせてもらえるとは思わなかった」と笑顔で何度もありがとうございますと言いながら帰られる方もいた。



図9 ワークショップの事前準備をするゼミ生



図10 ワークショップ中のゼミ生

#### 4-4.「モノ」でお寺に足を運んでもらう試み:寺院グッズ提案

寺院グッズは、「若い女の子がお寺で使いたくなる」というコンセプトでデザインされた、「扇子」と「数珠袋」を提案することにした。「扇子」は、蓮の花や万灯といった仏教からヒントを得たモチーフを使用しながら、普段でも使用できるような配慮がされている。「数珠袋」は、お坊さんのイラスト面と落ち着いたパターン生地面が気分を使い分けできるリバーシブルタイプと、ジーンズ生地を使用したファッションタイプなどがある(図11)。

グッズは、それぞれ数点のカラーバリエーションを展開した1冊の企画書にまとめ、住職の瀧厳丈氏を介して日蓮宗新聞社に提案することになった。

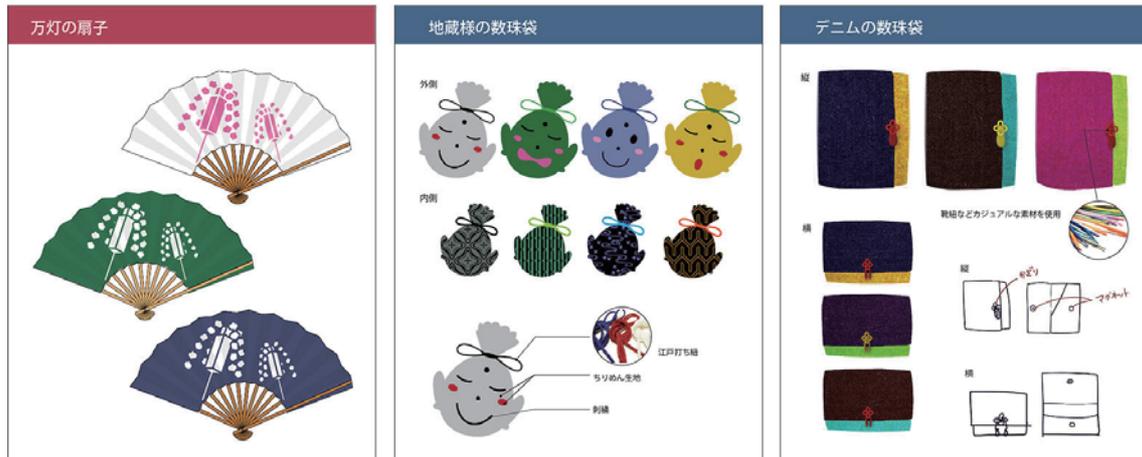


図11 企画書からの抜粋(万灯の扇子・お坊さんの数珠袋・デニム生地の数珠袋)

### 5. 効果と検討課題

「コト」でお寺に足を運んでもらう試みとして行った「すすきみみずく」ワークショップは、交通アクセスの不便さや広報不足などの理由から、参加対象者が「お会式」に参加していた檀家に留まり、厳密な意味では寺にとって新たな若者を集めるという目的が果たせなかった。しかし、ゼミ生はワークショップを開催するためにお寺を訪れ、お寺という空間の中で、檀家の方々との間に交流が生まれた。ゼミ生は寺にとって最初の新たな若者と言える。

「モノ」でお寺に足を運んでもらう試みとして行った「寺院グッズの提案」は、商品化には至らなかったが、お寺でもカワイイ小物を使用したい、という学生達の等身大の提案は今後の布石となった。企画書提案に対するフィードバックとして、「これからを担う若者からの忌憚のない意見・提案として、今後の商品開発に役立たせたい」との返答を日蓮宗新聞社より得た。

## 6. 考察

### 6-1. 若い世代に向けた寺院の取り組み事例

「コト」と「モノ」という2つの観点からの試みを一旦終えたあとにも、筆者の寺院問題に対する1度張り巡らせた情報のアンテナは、お寺や僧侶のユニークな試みや斬新なアイデアを受け取るようになった。それらは、学生と共通の関心事として今後も共有していく予定である。なかでも特に「若い世代に向けた仏教への入り口」となることを念頭に行われている事例について、モデルケースとしてその一部を以下に紹介する。

奈良市の浄土宗西迎院副住職、光誉祐華(こうよゆうか)氏は、歌と法話で仏教伝道ライブをする尼僧アイドル、その名も「愛\$菩薩(あいどるぼさつ)」として活動している。2017年頃から奈良の自坊にて、イベント『お寺SONIC ～略してテラソニ～』を開催。住職(父)による仏教講座、副住職である光誉氏の法事(法事と書いて「ライブ」と読ませる)という内容で各地より多くの人が集まるという。「愛\$菩薩」の活動理由は、ひとえに「自分と同世代の若い人たちが、仏教と出会うきっかけのため。そのための名前と姿。」と語り、潔い。

金沢市彦三町のカフェで月に1回開催している「坊主バー」が好評だという。真宗、曹洞宗、日蓮宗などの市内7宗派15カ寺の若手僧侶が協力して交代で店に立ち、食事や飲み物を、その時々に応じた法話を織り交ぜて提供している。客層の中心は20～30代、普段寺や仏教とは縁遠い人が多いという。真宗大谷派聞善寺、今井優悲(いまいゆうひ)住職は、「実際にお寺まで足を運ぶのは敷居が高いと思っている人たちに気軽に立ち寄って欲しい」と語っている。[北國新聞 2017.7.16]

インターネットで発注するオーダーメイドのお守り「OMAMO」が2015年12月にプレリリースされると若い女性に大反響を呼んだという。日本に伝わる「文様」に着目したポップな色合いとデザインが目新しい。進化系お守り「OMAMO」は、東京都大田区にある日蓮宗池上實相寺住職、酒井智章(さかい ちしょう)氏が広告代理店に勤務する2人のクリエイターと企画したものである。僧侶の監修のもと願いや悩みに合った文様を、お守りの上下で組み合わせで作られる。例えば、金魚の文様は中国の金与から「金運上昇」、青海波の文様は、繰り返す穏やかな波のように「良いことが続く」という意味がある。一度作られた組み合わせは二度と作られることはなく、世界でひとつだけのお守りが手に入る。「OMAMO」は願いが成就するようにご祈祷して作られるが、酒井氏は、「ネットを通していても悩んでいる人の切実な思いが伝わってくる。それをいかに汲み取ってご祈祷するか。数が多くなっても妥協したくない」と語っている。

新しい手法で仏教の教えを広める動きに対して、程度の差こそあれ、現状では賛否両論聞こえてくることは想像に難くない。しかし、当事者である若い僧侶たちは寺院が抱える問題に真剣に向き合い挑戦している。同世代の若い人々に向けて、仏教の深遠な教えをわかりやすく伝えられる形を入りに口に据えていると理解できる。

### 6-2. これからの寺院

#### 6-2-1. 日本人の宗教観

日本人の宗教の特徴は、シンクレティズム(宗教混交)にあるといわれている。クリスマスや初詣はもはやイベントかもしれないが、人が誕生すると、お宮参りから始まって、七五三、

受験の合格祈願、厄払い、結婚式は神式かキリスト教式、家を建てる時の地鎮祭、葬式は仏教が大多数という具合である。前述の國學院大學、石井研士氏によれば、「日本人は宗教団体には加入していないけれど、とても宗教的」[鵜飼 2016]であり、無神論者や無宗教者を自認しているような人々も、人生の節目節目で否応なしに、または無自覚のうちに宗教に触れていることが多い。

ここで、筆者も自身の宗教体験をたどってみる。幼稚園は、キリスト教保育を行うナースリースクールに通っていた。そのため、賛美歌を歌い、礼拝や食事の前など一日に何度も神様(イエスキリスト)に対して「アーメン」と唱えていた。日曜日には、聖書のおはなしを聞くため教会に通った。礼拝の終盤に回ってくる帽子に、ささやかな献金をすることで、平穏な生活が送れていると感謝した。また、小学生になり、京都の知人宅で「五山の送り火」をみて、山の斜面に沿って揺らめいているたいまつの明かりをととても美しいと感じたことを覚えている。当時はまだ、送り火が、お盆に戻ってきたご先祖様を、あの世に送り届けるために古より受け継がれてきた宗教行事だということは、理解できていなかったように思う。その後、10才の時に父が不慮の事故で亡くなってからは、母が自宅の仏壇でお経を上げる姿に習い、自身も朝晩と仏壇に参り、自然と「般若心経」を唱えられるようになった。ただ、そのときの感覚として記憶にあるのは、仏壇の中の仏様は、父の化身であり、父と対話しているという想い。曹洞宗の本尊がお釈迦様であるということはずっと後になって知ることになる。

些細なことかもしれないが、今回の寺院研修で「日本人がとても宗教的である」と実感した瞬間がある。圓融寺で行った寺院研修の2日目朝食時に、瀨さんの母の厚意により朝食を準備してくださったのだが、その食卓に、丁寧にパッケージされた箸の包みが食事と一緒に配膳された。包みを開くと中から「いただきます」と刻印された白木の箸が入っており、その箸の角は見るからに優しげに面取りが施されていた。そして、包みの内側に「いただきます」の意味が印刷されていた(図12)。学生達は食事を前に、全員が自然に手を合わせて一礼してから「いただきます」と言って食事を始めた。その姿を見ていて、食事のたびに無意識に発していた「いただきます」の習慣にも仏教の教えがあり、それが習慣となり、文化となっているのだと感じた。



図12 「いただきます」と刻印された箸

## 6-2-2. 寺院や僧侶の存在

作家であり、福島県福聚寺の住職でもある玄侑宗久氏は、「若い頃、住職である父に向かって『お寺の仕事とはなにか』と尋ねたことがあります。父は『交際業だ。間違ってもサービス業ではない』と教えてくれたことを覚えています。」[鵜飼 2016]と語っている。やはり、これからの時代に寺院にとって再生の切り札になり得るのは、これまで仏教の長い歴史の中で連綿と受け継がれてきた概念や戒律の伝承に加えて、社会との接点を探求して地域社会の人々とコミュニケーションを図っていくことではないだろうか。

記者であり、京都市正覚寺副住職である鵜飼秀徳氏は、「寺院や僧侶はどういう存在か」「なぜ寺院は必要なのか」という問いに対して「あなた自身をみつけれられるばしょだから」という解

を見いだした。自分につながる亡き人と再会できる寺院で、過去に思いを馳せることで、自分の存在意義を確かめることができる、と。

日本中にコンビニが50000件、寺院は77000件以上あるといわれている。そんなにあるのかと驚くと同時に、地域社会に隙間無く配置され、関わり合い、沢山なくてはならないものとして今後も機能していけるといい。

## 7.まとめと展望

約半年間をかけて「どうしたら、若い人がお寺に興味を持って足を運ぶようになるか」というテーマについて、学生達は、主体的に学び、他の学生と協議・協働しながら答えのない問いに対して学びを深めていくアクティブラーニングを行った。ゼミ生11名で取り組んだプロジェクトは、2016年10月にワークショップの開催と、学園祭広根ゼミブースでの寺院体験記録の映像による発表を行った。次いで同12月に、若い人が使いたくなるような寺院グッズのデザインを企画書にまとめて日蓮宗新聞社に提案することで一旦収束を迎えた。

年が明け、3年生だった学生達は4年生になり、卒業研究の取り組みが本格化していく中、濱さんはゼミで行った寺院プロジェクトを昇華する形で「イラストによって仏教世界を楽しく知る」を自身の研究テーマに掲げた。仏教をあまり知らない人でも興味を持てるように、実在する仏様や神様などを現代向けにアレンジしてキャラクターに描き起こす作業を進めている。また、キャラクター化した仏様や神様は、ミュシャ<sup>9)</sup>の画風にあるような模様デザインや、実際の仏具に使用される柄などを融合し、掛け軸風タペストリーに仕上げる構想を立てている。これら複合的な表現方法で制作された卒業研究作品をもって、題材にした神仏の世界観を、見る側に新鮮な興味の喚起を呼び起こす機会となることを願って制作に励んでいる。

卒業研究が完成したあかつきには、卒業研究展が開催される美術館で広く人の目に触れることになる。その後、自宅寺院の装飾として使用されることに留まらず、その作品の美しさとユニークさに共感を持つ寺院が現れて展示の輪が広がっていくかもしれない、と夢想している。濱さんの意思が見る人に伝わって仏教に興味を持つ若い人が増えることを願って、今は制作を見守っている。

今回行った、ゼミ活動における過疎地域の寺院問題に対する取り組みは、「若い人がお寺に興味を持って足を運ぶようになる」仕組み作りやその運用までには至っておらず、むしろ、課題解決には長い道のりがあることに気付かされたといっている。けれども、今回行った取り組みは、急激に変化している日本人の死生観に対して、「いずれ」ではなく「今」向き合うことで、先祖から連綿と受け継がれている自分という「命」の重さに気付く機会となった。さらに、仏教の入り口に立ち、その深遠な世界観をほんの少し垣間見ただけで、もっと知りたいと感じさせる真理が2500年続いている所以であると実感するに至った。この取り組みによって得られた経験は、不安定で不確実、かつ複雑で曖昧模糊とした現代のVUCAワールドを生きていく中で、物事を前向きに捉えることに繋がって行くと感じる。そして、「命」という大きなスパンで物事を俯瞰することは、デザインを学ぶ上でも大切な視座となると期待している。

## 謝辞

2日間に渡る寺院体験を始め、その後のワークショップ、寺院グッズのデザイン提案の全てに於いて、本覺寺と圓融寺の住職、瀨巖丈氏と副住職、瀨正通氏より、ご指導とご助言、貴重なお時間を頂戴しました。また瀨さんの母には、寺院体験中の飲み物や朝食の配慮をしていただきました。学びの場を提供いただき厚く御礼申し上げます。

## 注

- 1) 菩提寺に墓所がある檀家に課せられる年会費。
- 2) 寺の維持運営のために墓地管理料とは別途設ける寺が増えている。大規模な寄付を避けるために、護持費を修繕積み立て金に充てるケースもある。
- 3) 親族を含む参列者が30人以下の葬儀。密葬と同義。
- 4) 万物は一つに留まることなく、常に移ろい、驚くべきスピードで変化している、という教え。
- 5) 他人の福利を願うこと。
- 6) 日蓮宗の荒行は毎年11月1日より翌年の2月10日まで百100日間に及ぶ。荒行僧の一日は、早朝二時起床、一日七回寒水に身を清める「水行」、「万巻の読経」「木剣相承」相伝書の「書写行」を行い、食事は朝夕二回、梅干し一個の白粥のみ。日蓮宗では荒行を終えた僧侶のみに「祈祷」の秘法が相伝される。
- 7) もとはインドの鬼神で、500人とも1000人とも言われている我が子を育てるための栄養摂取のため人間の子供を捕まえては食べていたという逸話。
- 8) 1958年(昭和33年)日蓮宗宗務院内に新聞部を新設、編集・発行と教誌を発行していたが、1980年(昭和55年)日蓮宗の全額出資による株式会社日蓮宗新聞社として、宗務院より独立し現在に至る。 ※日蓮宗新聞社ホームページより
- 9) ミュシャ(Alfons Mucha)[1860~1939]アールヌーボーを代表するチェコスロバキアの画家。女性に花や流線を組み合わせた華麗なデザインで有名。

※文中の日蓮宗に関する記述に関して、瀨巖丈氏に監修いただきました

## 参考文献

秋田光彦,板倉杏介,2015,『生と死をつなぐケアとアート:分かれた者たちの共生のために』生活書院

鵜飼秀徳,2015,『寺院消滅:失われる「地方」と「宗教」』日経BP社

鵜飼秀徳,2016,『無葬社会:彷徨う遺体 変わる仏教』日経BP社

積徹宗,2016,『お世話され上手』ミシマ社

増田寛也,2014,『地方消滅』中央公論新社

若林唯人,2016,「フリスタがみた尼僧アイドルの素顔」『フリースタイルな僧侶たち』43巻号,フリースタイルな僧侶たち編集部

若林唯人,2016,「進化系お守り OMAMO」『フリースタイルな僧侶たち』44巻号,フリースタイルな僧侶たち編集部

日蓮宗本山金榮山妙成寺 <http://myojoji-noto.jp/> (2017.8.8 現在)

日蓮宗新聞社 <http://news-nichiren.jp/> (2017.8.8 現在)

光誉祐華 official website <http://idolbosatsu.jp/profile.html> (2017.8.8 現在)

OMAMO website <https://omamo.me/> (2017.8.8 現在)